

平成21年 5月28日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18720046
 研究課題名（和文） 戦後期日本の政治的・芸術的前衛と記録文学についての基礎的研究
 研究課題名（英文） Basic research on political and artistic avant-gardes
 and their relation to reportage literature in postwar Japan
 研究代表者
 鳥羽 耕史 (TOBA KOJI)
 徳島大学・総合科学部・准教授
 研究者番号：90346586

研究成果の概要：著書『運動体・安部公房』を核とする形で、戦後の政治的・芸術的前衛と記録文学の世界が互いに関わり合いながら展開していった様相を明らかにすることができた。ここでは、シュルレアリスムや寓話、さらに絵画や記録映画の方法論を用いた様々なリアリズムが探求されていた。それらを結ぶ民衆的な基盤としてのサークル運動とそれを拠点としていた生活記録運動も含め、戦後期の「記録」の多様な展開が明らかになってきた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,600,000	0	1,600,000
2007年度	1,100,000	0	1,100,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	240,000	3,740,000

研究分野：日本文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：

1. 研究開始当初の背景

(1)戦後期の前衛文学については、反リアリズムとしての構想力を評価するタイプの研究や、その発想の源泉となった思想的基盤を探るタイプの研究が主流であり、基礎的な事実関係の調査の上での研究や、芸術運動との関連についての読解は、他に類を見ない。記録文学については、杉浦明平ら実作者や、松浦総三らジャーナリズムの視点からのいくつかの整理があるにとどまり、未だ本格的な研究がなされていない状況である。

(2)安部公房の前衛文学については、海外における研究も盛んである。"The fantastic stories of Abe Kobo", Paul Henry Krieger,

University of Minnesota, 1991、"Science and fiction in the work of Abe Kobo", Christopher Andrew Bolton, UMI Company, 1998、"Abe Kobo: an Exploration of his Prose, Drama, and Theatre", Timothy Iles, European Press Academic Publishing, 2000などが90年代以降の仕事として挙げられる。さらに近年、特に70年代の安部公房スタジオを中心とした舞台に関する仕事にも注目が集まっており、"Fake Fish: The Theater of Kobo Abe", Nancy K. Shields, Shambhala Pubns, 1996 (『安部公房の劇場』、ナンシー・シールズ、安保大有訳、新潮社、1997年)、『安部公房の演劇』、高橋信良、水

声社、2004年、や、『安部公房スタジオと欧米の実験演劇』、ジャンルーカ・コーチ、彩流社、2005年などの著作が刊行されている。また、安部と共に〈世紀の会〉において前衛画家として活躍した経歴を持つ勅使河原宏については、"The delicate thread: Teshigahara's life in art", Dore Ashton, Kodansha international, 1997という評伝が出版されている。これらは構想力において国内の研究よりもスケールの大きいのが特長だが、Ashtonの仕事を除いて調査や論証の緻密さに欠けるのが短所と言える。例外的に緻密かつ大きな構想力をもった研究は、"Abe Kōbō, Literary Strategist: The Evolution of his Agenda and Rhetoric in the Context of Postwar Japanese Avant-garde and Communist Artist's Movements", Thomas Schnellbacher, Iudicium, 2004である。安部公房の戦後15年ほどの活動に関係者のインタビューなどを通して精密に調査し、あわせて同時期に発表されたエッセイの分析を行ってみせたこの研究は、国内外を通して現時点で最重要な研究の一つであり、この研究に日本の側から応えていくことが課題の一つとなるだろう。一方、国内の研究は全体の見通しを欠いた個々の作品論にとどまるものが多かったが、近年になっていくつ重要な研究が出てきている。一つは『越境のアヴァンギャルド』、波瀲剛、NTT出版、2005年であり、前衛概念について国内外の状況を踏まえた重要な研究となっている。また、「連続する「変貌」」、蘆田英治、『遊卵船』、2号、2005年や「幽霊と珍獣のスペクタクル」、日高昭二、『文学』、第5巻第6号、2004年も安部公房研究の新しい境地を切り開いたところである。本研究では、AshtonやSchnellbacher、波瀲や蘆田や日高における芸術的な前衛概念に関する成果を引き継ぐ形で、これらにおいてはあまり大きく扱われなかった政治的な前衛とのダイナミックな関係に迫る、新たな前衛概念を提示したいと考える。

(3)記録文学については、近年、相次いで雑誌特集が生まれ、ようやく関心の高まりを見せている段階である。本研究では、こうした特集における「杉浦明平『ノリソダ騒動記』」、藤森清、『国文学』、46巻13号、2001年、後者における「五〇年代ドキュメンタリー運動—生活を綴る—」、佐藤泉、『昭和文学研究』、第44集、2002年などの成果を踏まえた上で、独自の記録文学像を描くことができると考えている。また、"The American Occupation of Japan and Okinawa: Literature and Memory", Michael S. Molasky, London: Routledge, 1999が提起した記録文学の「やらせ」の問題も重要である。これは「戦後日本の表象としての売春」、坂

元昌樹・鈴木直子訳、『みすず』、1999～2000、や、「占領の記憶—日本と沖縄における言語・ジェンダー・アイデンティティ—」、鈴木直子訳、『現代思想』、31巻11号、2003年、などの形で部分的に邦訳されているが、Molaskyは『日本の貞操』などの女性の手記として刊行された著作が実は男性によって書かれたフィクションであったという発見を示している。このような記録／虚構の境界線の問題や、なぜそれが記録として発表され、そのことがどのような効果を生んだのかという問題について、深く掘りさげていく必要があるだろう。

2. 研究の目的

安部公房に代表される戦後の前衛文学と、杉浦明平に代表される戦後の記録文学とを表裏一体のものとして追究する構想ではじまったこれまでの研究の中で、両者をつなぐものとしての政治的前衛の役割の大きさが見えてきた。特に、いわゆる「五〇年問題」と呼ばれる1950年の共産党分裂抗争の最中に生れた雑誌『人民文学』と、その周辺の無数のガリ版サークル誌には、政治的前衛と芸術的前衛とがせめぎあいながら同居していたことが明らかになってきた。どちらの立場もそれぞれに記録の試みを行っていたのがこの時代の特徴であって、政治的前衛に傾いた立場から生活記録運動や生活綴方運動が起こり、芸術的前衛に傾いた立場から様々な形式の探訪ルポルタージュや杉浦らの地方定住知識人のルポルタージュが書かれることになった。また、当時の関係者のインタビューなどを行っていく中で、芸術的前衛を追求した安部公房や花田清輝らにとっても、政治的前衛の意味が非常に大きかったことが明らかになってきた。いずれにせよ、広い意味での「記録」の時代としての1950年代とその文学・芸術を考える時に、政治的・芸術的前衛を避けて通ることはできない。『人民文学』については、これまでに総目次を作成して研究の基盤を整えたが、今回の研究においては、まず『人民文学』の後継誌として発行された『文学の友』と『生活と文学』について、調査収集作業を継続して行っていきたい。また、政治的前衛の様相を探るために、当時の共産党のガリ版パンフレットなども可能な限り参看しつつ、必ずしもトップダウンではない形の前衛のあり方を見きわめたい。そうした作業によってこの時期の両前衛に関わる出版物を整理しながら論考を加えていく方法をとる。最終的には、彼らがどのような未来像を描いてこの時期の活動を行っていたのかを示し、その過程で生まれた両前衛における新しいリアリズムのあり方について明らかにするのがこの研究の目的である。

3. 研究の方法

(1)国内外の図書館・文学館・古書店から、広く記録文学・前衛文学・芸術に関わる文献を収集する。国外については、米国メリーランド大学ブラング文庫に所蔵される占領期検閲文献資料は、雑誌の一部がマイクロフィルム化されているが、それ以外の雑誌や図書については現地での確認が必要である。この資料は、近年横手一彦氏によって精力的に紹介・分析されているが、いわゆる純文学資料が中心となっているため、本研究においては、記録文学関係の資料を中心に、何が削除されたかの詳細を含めて基礎的調査を行いたいと考えている。また、同じく米国コロンビア大学のドナルド・キーン文庫には遺族から寄贈されたまま未整理の安部公房関連資料が収められている他、キーン氏と親交のあった多くの戦後文学者による書簡も寄贈されており、当時の文学・芸術運動の資料として貴重なものが多く含まれているため、出張調査を行いたい。国内については、神奈川近代文学館に所蔵される野間宏文庫をはじめとする戦後サークル誌資料について、政治的前衛と芸術的前衛の接点という観点からの調査を行いたい。また、愛知県豊田市の豊田中央図書館の本多兄弟文庫も重要である。一部整理中のこの文庫は2007年までには整理が終る予定だが、文芸評論家・本多秋五とその兄・本多静雄の資料を十万点以上所蔵しており、資料共に野間宏文庫と並ぶ戦後文学に関する第一級の資料として活用されることになるだろうし、今回の研究にも関わる資料が大量に埋もれている可能性がある。同じく愛知県渥美町の渥美町立図書館には杉浦明平が寄贈した杉浦明平寄贈図書室があり、戦後の政治やルポルタージュ関係の貴重な資料が含まれる可能性があるため調査する予定である。この他、大阪府茨木市の富士正晴記念館の同人誌資料、福井県丸岡町の丸岡町民図書館内中野重治文庫の戦後文学・政治関連資料、東京都町田市の法政大学大原社会問題研究所の労働問題関連資料、東京都目黒区の日本近代文学館の文芸誌資料、東京大学社会科学研究所の戦後社会問題関連資料などを調査し、この時代の政治・芸術における前衛について、幅広い一次史料を収集する予定である。また、前衛芸術運動の渦中にいた画家・桂川寛氏をはじめ、同じく画家の池田龍雄氏、評論家の瀬木慎一氏へのインタビューも継続して行い、文章化されていない事実も究明していく。

(2)資料の収集作業を進め、研究協力者の助言を得ながら、戦後期の政治的・芸術的前衛と記録文学に関する考察を進め、それぞれについての論考を発表する。また、政治の前衛と芸術の前衛の接点についての調査の基礎資料として、雑誌『人民文学』の後継誌であ

る『文学の友』『生活と文学』の調査収集作業をまとめたい。

(3)研究の総まとめを行う。資料の収集は引き続き行うが、新しい資料の収集よりも、それらの分析・公開に重点を置いていきたい。具体的には、まず記録文学や記録映画についての論考をまとめる。また、政治との関係における前衛文学・芸術の広がりについてもまとめを行い、それらを踏まえた上で、戦後期の新しいリアリズムの形態について、総合的な論考をまとめて発表する。

4. 研究成果

著書『運動体・安部公房』を核とする形で、戦後の政治的・芸術的前衛と記録文学の世界が互いにやり合いながら展開していった様相を明らかにすることができた。そこでは、シュルレアリスムや寓話、さらに絵画や記録映画の方法論を用いた様々なリアリズムが探求されていた。それらを結ぶ民衆的な基盤としてのサークル運動とそれを拠点としていた生活記録運動も含め、戦後期の「記録」の多様な展開が明らかになってきた。

具体的には、岡本太郎と花田清輝にはじまる戦後の前衛芸術運動と、それに遅れてきた世代の吉本隆明との関わりをめぐる問題が、安部公房に次いで明らかになった部分である。また、富士正晴、開高健、石川淳、大西巨人といった戦後の文学者たちの時代との関わり合いについても、今まで論じられてこなかった側面を論じることができた。スガモプリズンを扱った映画の系譜から見えてくる社会的問題、ダム映画を中心とする岩波映画製作所の記録映画に関する問題なども、広義の「記録」の問題として扱うことができた。また、生活綴方運動を中心とするサークル運動と「記録」の問題に関する調査にも着手したが、これについては今後の継続課題となろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

鳥羽耕史、世代論・座談会論・サークル論—花田清輝・吉本隆明論争—、現代思想、査読有、36巻11号、2008年、144～157頁

鳥羽耕史、安部公房「砂の女」—性的な戦略について—、国文学 解釈と鑑賞、査読有、73巻4号、2008年、121～126頁

鳥羽耕史、紙の中の不可耕土—開高健『ロビンソンの末裔』—、昭和文学研究、査読有、56集、2008年、97～110頁

鳥羽耕史、映像のスガモプリズン—「壁あつき部屋」と「私は貝になりたい」—、現代思想、査読有、35巻10号、2007年、124～137頁

鳥羽耕史、『新日本文学』の富士正晴、C A
B I N、査読無、10号、2008年、20～26頁
鳥羽耕史、キャッチャー・岡本太郎—〈夜の
会〉前後の芸術運動—、國文學 解釈と教材
の研究、査読有、52巻2号、2007年、52～
60頁

〔学会発表〕(計5件)

鳥羽耕史、岩波映画の可能性を見る、シンポ
ジウム「岩波映画の1億フレーム」、2009年
2月14日、東京大学

鳥羽耕史、Abe Kôbô - Anti-historicist
Writer: Marxism and Leftist Practice in
the 1950's, Digital Archive and the Future
of Transpacific Studies: The Second
International Symposium、2008年9月14日、
Cornell University, Ithaca, NY, USA

鳥羽耕史、石川淳と演劇—「千田是也演出の
ために」の射程—、第34回国際研究集会「石
川淳と戦後日本」、2008年6月28日、国際日
本文化研究センター

鳥羽耕史、詩運動のローカルな中心: 高知『鉄
と砂』のネットワーク、思想史・文化理論研
究会第140回例会、2007年3月23日、神戸
学生青年センター

鳥羽耕史、サークル誌ネットワークの広がり
と密度—一九五〇年代文学のプロフィール—、
日本近代文学会11月例会、2006年11月25
日、白百合女子大学

〔図書〕(計3件)

福岡市文学館編、福岡市文学館、走り続ける
作家 大西巨人、2008年、60頁(30頁)

鳥羽耕史、一葉社、運動体・安部公房、2007
年、350頁

清水良典編、鼎書房、現代女性作家読本5 松
浦理英子、2006年、156頁(106～109頁)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鳥羽 耕史 (TOBA KOJI)

徳島大学・総合科学部・准教授

研究者番号: 90346586

